

第一節 嵐の前に……

惑星シエルメスの南半球。いわゆる照葉樹林帯に位置し、晩秋の美しさで知られる連邦首都郊外の空軍官舎を一組の男女が訪れたとき、鮮やかな夕暮れの陽射しは晩秋の夕闇に座を譲り始めていた。

連邦暦五六九年二月一〇日。炎暑の季節は既に数カ月の過去となり、日の落ちた連邦首都を包む空気は爽涼から冷涼に、冠せられる修飾詞を取り替えたつがある。

「マイクス・オブ・スルフエイク」

「スルフエイク侯爵？」

「そうです、あなたは？」

ドアが開くと同時に、迎えに出た三〇代前半の端正な容貌の男性は、まず怪訝そうに男を見上げる。その傍らに佇む女性に視線を転じた時、貴族的な風貌が驚きに震えた。

「メイ……！」

「小官はテイ・リユン・ホウ連邦空軍少佐です。プリンセス・メイリアをお送りして参りました」

岩の塊のようなこつい容貌に人なつこい笑みを浮かべた将校は、鮮やかな拳手で青年……メルティアのスルフエイク侯爵……の無言の疑問に答える。

「プリンセス・メイリアはよくやって下さいました。いずれ、連邦政府と連邦空軍は正式に、侯爵とプリンセス・メイリアに感謝の意を示すであるつとのことです。さし当たり、プリンセス・メイリアには一カ月の休養を取っていただくことになっております」

シエルメス ル・ヨント戦争……後に“前期銀河系大戦”と呼ば

れた星間戦争の初期、いわゆる“ローナクの虐殺”により国家としての主要な機能を破壊されたメルティアを、連邦大統領タウナーは“一年で再建してみせよう”と豪語した。タウナーは巨額の臨時予算を通過させ、連邦政府に『メルティア再建省』を設置して精力的な活動を展開している。

その一方で、メルティア政府首脳は連邦空軍の手によって救われ、連邦首都の一面に臨時政府を置いているが、こく一握りを除いたほかは、眠ったことく何らの活動も示してはいない。

メイリアの兄であるスルフエイク侯爵ラルク・トヒユナが極く一握りの例外の一人として多忙極まる生活を送っており、この日の夕刻に帰宅予定であることを調べ上げるまでに、テイ少佐はさして時間を費やさなかった。

「一カ月の賜暇ということは、連邦はメイに軍務を続けることを希望している、と理解していいのかな」

「いえ……」

テイ少佐は否定する。連邦空軍は、王女の身で一カ月間にわたって最前線に立つて貰ったことに最大限度の感謝をしている。

「艦隊への搭乗継続は、プリンセス・メイリアご自身の意志に委ねる……もし、搭乗の継続を望まれるのであれば、連邦空軍はプリンセス・メイリアに対して特命の中尉、艦隊総参謀長付きの副官任務を用意する旨、侯爵にお伝えせよとの命令を受けております」

勧められたフランデーの一杯を鮮やかに空けると、テイはもう一度鮮やかな拳手で暇を請った。

「お邪魔をしては宜しくありませんから、侯爵。小官もこれから家族のもとへ帰ります」

「無事でよかった……“アルヴェスタ”のニュースも聞いた」

「アルヴェスタ会戦」での大敗北は一月半ばに報じられたが、連邦母星は意外なほど平穏だった。会戦場そのものが約二〇〇〇光年余も離れたアルヴェスタ宙域。過去に何度も激しい内戦を経験し、その都度連邦空軍の勝利をまのあたりにしている連邦市民にしてみれば、一度や二度の局地的な敗北で連邦が戦争そのものを失うとは考えられないのだろう。

「恐ろしかった……とても……」

メイリアは言葉が少ない。生まれて初めて経験した大会戦は、悪夢とは思われない。僅か数日の会戦で、敵味方の死傷者は優に二〇〇万を上回ったのだ。

ためらい、ラルクは問う。

「戦艦を降りるのだね」

「お兄さま……」

思い詰めた表情の妹を見つめ、ラルクは多少疎ましげに眉を寄せ

る。

「メイ……」

やめたがいい……言いかけた言葉に、メイリアが言葉を被せる。

「この戦争が終わるまでは搭乗^カってほしいの、お兄さま」

「降りる気はないのかね、メイ……」

「降りたくない……」

ラルクは手にしていたグラスから白ワインを一口、咽喉に流し込む。ワインの芳香に誘われたように、古い記憶の泡が弾けて脳裏に浮かび上がった。

「調べてほしいの、レーフラム・ネレイドという人のことを」

ラルクとは一〇歳以上歳の離れたメイリアは当時、ようやく

一六歳。久方ぶりに故郷^{スルフェック}での休暇を許されたメイリアが、思い詰

めた表情で訴えたのは『シグナ・レート』号のメルティア進駐後間もない、四年前の一日だった。

「レーフラム・ネレイド？」

連邦圏ではさして珍しくもない姓は、歴史家としてのラルク・トヒユナには血で記された歴史のページを想わせた。一ページや二ページではない。それだけで、連邦の裏面史の重要な数章を占めるに足りるだけの流血と陰謀を、その名は伴っている。

「……そのネレイドなのか、メイ？」

当時、メイリアはまだ一度も彼と言葉を交わす機会を得ていなかった。そして、結局、言葉を交わすこともないままにレーフラムはメルティアを離れることになる。当時も、そしてその後、レーフラムに想いを寄せるようになった事情を、メイリアは頑なに話すのを拒んでいた。

「いいのかな、メイ」

妹の表情を敢えて無視し、ラルクは問い返したものである。

「調べて、それでどうするのだね。若くして超ド級戦艦の主任砲術士官を務め、しかもその後で制式艦隊の作戦参謀になるほどの軍人だ。それにレイフレム・ナイザル・ネレイドと言えば、連邦の影の大統領と言われるほどの辣腕のマキャベリストだ。

調べてみて、彼がお前の思っているような人物でない、とわかったとして、それでもいいのかな」

何故だろう……と時々、メイリア自身ですらそう思っていることをラルクは知らない。見ず知らずと喋ってよかった。『シグナ・レート』号のメルティア進駐までは……そして、その後、ローナク^クの虐殺^クでレーフラム自身が救出にきてくれるまでは、言葉を交わす機会すらなかったと言つのに……。

「調べて、お兄さま」

にもかわらず、あの時、彼女は何のためらいもなく言い切った

のだ。

「知りたいの、あの人のことが」

「どうしても降りないのかね、メイ？」

「ええ、どうしても……」

溜めていた息をそっと吐き出し、ラルクは心づいたように3DTVのスイッチを入れる。

“……このように、ほんの数年前に連邦と紛争を起こしたのが、反連邦活動の急先鋒たるメルティア王国だったわけですが、そのメルティアのプリンセス・メイリアが自ら望んで戦艦に乗り、戦場に赴いている……このあたりをいかが思われますか、クアシム上院議員？”

“大衆はお姫さまが好きですからな”

彫りの深い顔立ち、浅黒い肌によつと収まりの悪い干し草色の髪の子の男、過去に何度もメルティア王宮の客人となったその人物を、メイリアの優れた記憶力は正確に覚えていた。連邦上院議員の一人、セリア恒星区のレイナル・クアシム。

クアシムの、流暢というよりも圧力的な語調は皮肉の微粒子をたつぷりとまとって、司会者をたじろがせたようだった。

“それも芳紀まさに一九歳の美少女……プロパガンダにはうってつけではありませんか？”

第一次建艦補充計画で、連邦空軍は三期で数十万隻の戦艦の建造を要求しています。費用を負担するのは連邦市民だ。利益を受けるのは一握りの政産軍複合体の幹部たちでしかない。

考えていただきたい。通常型の巡航戦艦一隻の建造費用は五から六〇〇〇万UD（連邦共通通貨）に達し、維持費用はその二から三倍に達するのです。巡航戦艦だけでも一万余隻をくだらない数が建造されるとすれば、どれほど巨額の金が、戦艦などというがらくたを

建造し、維持するために無駄に費消されることになるのか……そして、そのための負担がどれほどの額に達し、誰が負担することになるのか、ひとつ冷静に計算し、報道していただきたいものです。

上院議員の一人として、プリンセス・メイリアの献身には感謝している。しかし、それは、彼女一人の意思によるものであって、メルティアの意思ではない。まして、プリンセス・メイリアが戦場に立っていてくれるからといって、連邦市民がル・ラント共和国との戦争と、それに伴う出費に異議を唱えてはいけない、などというのは典型的な情緒的報道であって、冷静なジャーナリズムの採るべき態度ではない……私は少なくともそう考えますな”

“しかし、メルティア政府は『女王の貴重な生命を連邦空軍に委ねている……』と発言していますね”

やりにくそうな司会者に、クアシムは更に皮肉っぽく唇を歪めて見せた。

“結局は連邦政府に救われた“借り”の返済を求められることへの牽制ではないか、と邪推できるくらいですよ。リップ・サービスなら安いものですからな”

“お兄さま？”

プラチナ色の眉を震わせるメイリアに、ラルクは放り出すように肩を疎める。

“こつという調子だ。クアシム議員は来年の大統領選挙に立候補しているのだよ。レークシー副大統領は戦争の継続を、クアシム議員は早期講和を謳ってね”

“……メロス、アルヴェスタの屈辱を晴らし、プリンセス・メイリアの献身に応えようではないか”

レークシーの大統領立候補演説が併映されたとき、メイリアは自分の両肩を抱き締めるようにして、華奢すぎる身体を震わせた。

「分かったかね、メイ」

誰もがメイリアの“勇気”と“献身”を讃える。戦死でもしてくれば、連邦もメルティアも嬉々として“連邦葬”や“王国葬”を用意することだろう……多分に偏見だろうが、自分の推測が正鵠のすぐ脇を射ていることを、ラルクは疑わない。

「これが連邦だ。連邦もメルティアも、お前が最前線に出ることを歓迎はしている。しかし、お前の身を案じてなどはないのだよ」

「ええ……でも」

「メイ！」

「叔母さまあー！」

澄み切った声が、ラルクの言葉を咽喉の中に封じた。

いつの間にか起きたのか、パジヤマ姿のファーリアが居間の入口に立っていたのだ。

「ただいま、マーシャ……」

「お帰りなさい、叔母さま」

少し眠そうに、しかし、嬉しそうな口調をファーリアは隠そうともしない。

「マーシャったら……その叔母さまはやめてくれない？」

「……つつん、やっぱり叔母さま……」

ファーリアはきかんに肩を揺する。ふわりと肩を蔽う水晶色の髪がゆらゆら揺らめいて透明な輝きはらむ。しようがないわね、とメイリアは苦笑するしかなかった。

いつも交わしてきた会話、だった。メイリアは生きて還れた、という実感を味わうと同時に、姿のない人のことを思った。スルフエイク侯爵妃シエリア・ハーム・トヒユナ……“ローナクの虐殺”の時、ラルクとシエリアはスルフエイク市民の避難誘導のために最後の最後まで地表に留まった。

ローナクが無差別爆撃を狙ったわけではないことは明らかだった

が、戦場で一〇〇パーセントのピンポイント攻撃はあり得ない。結果としてファーリアを含めた侯爵一家三人が最上層シェルターまで退避した時に、誘導を外れた超融合核ミサイルの数発がドルス市街の外縁部を直撃したのだ。

シェルターは落盤を起こし、シエリアはその中に巻き込まれた。他のシェルターとの連絡も断たれ、生命維持装置も大半が破壊された。救出を半ば諦めたラルクが、ファーリアを怯えさせまいとして睡眠薬を与え、最後の希望を捨てようとしたときに、『シグナ・フォース』号のレーフラム・ネレイドの指揮する一隊が彼ら父娘を救出したのだった。

そのレーフラム……と、メイリアの思いは、しかし、どうしても数千年彼方に引き寄せられてしまふ。メイリアは奇妙な胸騒ぎに襲われて、ロイヤル・ブルーの瞳を曇らせる。自分ひとり、こうして母星に帰って来てしまったが、それは正しい選択だっただろうか……“命令”と言われようと、やはりヒューロザイオンに残っているべきだったのではないだろうか……

ファーリアが小さく欠伸をし、甘えるようにメイリアにもたれかかった。未だ母恋しい年頃。頬をメイリアの胸に押しつけ、細い腕を背に回してしがみついてくる。

「メイ、今夜はファーリアと一緒にいてやってくれないか？」

「お兄さまでは駄目なの？」

ちよっとからかうような口調に、ラルクは懺然として応じた。

「私では母親のかわりはできないよ」

否やはなかった。

メイリアは、眠そうに目を擦っている幼い姪を抱きあげ、寝室へ連れていった。

ヒューロザイオン宇宙要塞は、連邦母星と植民惑星カルシユの属するヘルエス恒星系を結ぶ航路の中間点、連邦母星から六〇〇光年あまりの宙点に浮かんでいる。

F三型主系列恒星ラテナの惑星軌道に位置された巨大宇宙要塞ヒューロザイオンは大型の小惑星を改造したもので、赤道直径は実に一五〇キロ。質量六〇〇兆トンにおよぶ。宇宙港の収容艦艇数は二〇万隻。表面は完全鏡面仕様の超合金と結晶繊維の複合装甲。要塞主砲は『シグナ・フォース』級超熱線砲^{アニレクタ}の数倍の出力を誇り、常備兵員一五〇万、民間人を含めた収容最大人員は約三五〇〇万人……など、要塞の巨大さを語る数字には枚挙に暇がない。構築には連邦の技術と工業力の限りを尽くしても一〇年近くを要した。その規模はル・ラント共和国圏最大を謳われるナキャソ宇宙要塞やドライバオム宇宙要塞を遙かに上回る。連邦空軍最大の艦隊根拠地であり、「連邦空軍のジブラルタル」と呼ばれる連邦圏最大の宇宙要塞だった。

……クローネス・マールク、共和国宇宙軍元帥……か。

レーフラム・トウリユー・ネレイドは考え続けている。

マールクが四万の全艦隊をウィルフ宙域に集中すれば、会戦の勝利自体は容易なものであったはずだ。あくまで殲滅を狙って策を弄し、かえって連邦空軍の主力を取り逃がした。とは言え、辺境艦隊一個が壊滅し、制式艦隊も兵力の六割を失った。

恐るべき敵だった。

戦術的な完全勝利を上げて連邦市民の戦意を根底から破壊し、講和に傾けようとしたのだらう。しかし、その意図は寸前でレーフラムによって阻止された……とは言っても、二〇〇万を超える兵員の損失は市民の、軍への痛烈な批判を招いている。

……何故、政府が動かない？ 外交は何をしている？

“アルヴェスタ会戦”での連邦空軍の損害は連邦始まって以来の巨大なもので、連邦政府、空軍首脳とも“ル・ラント恐るべし”の感を強め、その実力に対する認識を新たに行っているのだ。今なら、ウィルフ、アルヴェスタ、ネフェルトほかウィルフから半径一五〇〇光年の宙域割譲という条件でも、連邦政府はあっさり呑むだろう。半減した連邦空軍艦隊ではマールク艦隊の第二撃を受け止め切れない。が、予想に反してル・ラント政府は何らの働きかけもしていない。

「大人しく寝ていないと、メイとエイミイが心配してよ、ネレイド参謀長殿」

「何だ、エリイ、帰国していなかったのか……」

メルティア薔薇の花束を抱えて現れたエリサ・ナーバン中佐の姿に、レーフラムはちょっと意外そうな声をかける。エリサは、年齢こそレーフラムより上だが、士官学校では彼の一期後輩になる。

「フレットは？」

エリサの婚約者の名前を出す。フレット・ラーグラント中佐とエリサの婚約が公表され、“連邦空軍随一の才媛”を射止めたラーグラント中佐が連邦空軍中の独身士官達からやっかみ半分の祝福を集めたのが半年前。

ラーグラント中佐は、『シグナ・フォース』号の完成と同時に、連邦空軍艦隊の後方先任参謀に任じられ、エリサも史上最初の超ド級戦艦に研究要員として乗り組んだ。“銀河系大戦”がなければ、今頃は挙式を済ませていたはずなのだ。

「艦隊搭乗員の殆ど全員が要塞に足止め」

エリサは僅かに肩を竦めた。

「長官からの命令で？」

「政府からのね。閣下は、私たちが望むのなら一か月の帰国許可を下さるとおっしゃったわ。でも断った。この非常時ですもの……フ

レットには申し訳ないけれど」

「非常時なんて言葉、やめてくれないか」

レーフラムの表情が険しくなった。エリサが戸惑ったようにレーフラムの顔を見直す。

「え？」

「嫌いなんだ。その言葉が」

非常時だ、非常時だと、それをお題目のように唱えている連中に限って、その非常時、即ち戦争で莫大な利益を得る一方で、決して危険の及ばない安全な立場を確保しているのはどういうわけなのか。そついう連中が支配し、おのれの幸福を追い求める個人を非常時などと言つ厭わしい言葉で縛る国家など、滅びて何の惜しいものか。

まだ熱の高いせいか、レーフラムの思いはとんでもない方向に羽を広げる。連邦最大の軍需産業を支配するのはシュレフ・コングロマリット。そのシュレフと親密な協力関係にある父ナイザルへの反感が、彼を苛立たせてやまない。

「取れる内に休暇は取っておくべきではないのかな。一か月くらいなら、ル・ヤントも大人しくしていてくれないこともないだろう」

「連邦空軍随一の戦略家にしては観測が少し甘くはなくて？ ル・ヤントのマーク元帥はそんなに甘い相手かしらね？」

エリサは微笑って応える。病室に備え付けの花瓶に持つて来た花束を差して見て、輪郭のはっきりした眉を不満そうにしかめる。

「ファイン・セラミックの花瓶ではね……メイの丹精も報われないわ」

「青磁の花瓶を置くわけには行かないよ、ヒーローヤン要塞に……メイの丹精だつて？」

「ええ……知っていて？ メルティアン・ローズメルティア蔷薇、それも旗 シンク・フォーミス艦にメ

イが植えた花の移し植えたら、その艦は沈まないって」

「噂……か？」

「そう、噂、というか……もう二〇〇〇隻近くから移植の申し込みがあつたそうよ」

「艦隊の六割が沈む会戦なんて、これまでに前例がなかった……さしもの連邦空軍将兵も頼るべきシンクスが欲しくなつたと言つところかも知れないな」

ふと、話題を切り換えた。

「メイは……？」

「母星に帰つた。閣下の命令で。それに、ネレイド参謀長の樂觀的な見通しを見せられて安心してね……」

心なしか、エリサの声に微妙な皮肉の刺が植え込まれているような気がするの、レーフラムの引け目だったかもしれない。メイリアを危険に遭わせるのが堪え難く思われるようになったのは、アルヴェスタでの大会戦の直後だったから。

半年以上も沈黙を守つていては、折角の大勝利も忘れ去られ、戦略的な意味すら失つ。マークほどの男がそれを知らぬわけではない。矢継ぎ早に第二、第三撃を見舞つてくると考えた方が自然だったのだ。

では……？

あれほどの大勝利を得て連邦政府を震撼させながら、外交戦という最強の武器を使わないル・ヤント共和国の内情が、彼には概ね推測できる。使わないのではなく、使えないのだ。

緒戦の勝利に酔い痴れ、部分的な条件付講和では満足できなくなつている市民と、彼らを煽動することで政権を維持し、権力を保持している“非常時”の大好きな政治家者たち……マークは、政治のバックアップを受けられず、戦術レベルでの勝利のみで戦争に勝つことを要求されているに違いない。

……いずれ、使えるかも知れないな。

ル・ラント共和国政府の首脳に共和国を売らせればいいのだ」と。彼ら自身と家族の生命と財産、連邦圏での富貴に満ちた生活を約束してやれば、共和国政府の首脳は喜んでマールクを失脚させるのではないか。マールクと彼の幕僚たちがいなくなれば、共和国宇宙軍など骨抜きに等しい。

……自分に政戦両略の全権があれば、そうする。きつと、成功するに違いない……そして、あの男なら。

思い出したくない名前を思いだし、レーフラムは激しく首を振った。勝つこと、ただ勝つことだけを考えれば、どこまでも卑劣で陋劣になり得る。そして、最も卑怯な手段に躊躇いを示さない者のみが戦争の勝利者となるのだとしたら……

とにかく勝つことだけを求めるのなら、マールクもその種の辛辣な策略を弄してくるだろう。政治と外交の助けを借りられない彼としては、謀略で連邦を混乱させ、分裂させるしか勝利への道はあり得ないではないか。

レーフラムの目蓋の裏に幾つかの惑星が浮かんで消える。コーラル恒星区のカルシュ、デュレオン恒星区のローウエス、セリア恒星区のタルト。そして、エルメティアのメルティア……

連邦はあまりにも巨大な恒星間国家であり、多民族国家でもある。ともすれば分離し、完全な政治的独立を得ようとする各恒星区を、連邦空軍という強大な軍事力、いわゆる“連邦圏の鉄の爪”で鷲掴みにしているシエルメス連邦。マールクの付け込む隙はあり過ぎるくらいだ。

連邦初代の大統領となったスティクフェスト・シャトンヒュッテは連邦空軍の軍人として連邦統一戦争に辣腕を揮った。その余りに苛烈なやり方は、先代のスルフェイク侯爵フーリック・トヒュナをして、

『……少数民族問題！ 古来、どれほど多くの複数民族国家がこの問題に直面し、解決し得ないがゆえに滅びの歌を合唱してきたことだろう。しかし、ここに至って、我々は古くから行われて来たものとは全く異なる解決法が存在することを、シャトンヒュッテ提督によつて学ぶことができたのである……』

と歎かせた。

『その解決法とは……』

フーリックは続けている。

『即ち、問題の源泉となる少数民族を最後の一人に至るまで殺戮し尽くすことがそれである』

惑星統一戦争での死傷者は二〇億近く。数千の少数民族がシャトンヒュッテに戮殺された。シエルメス連邦は、彼らの累々たる屍の上に築き上げられたのだ。

『ドクタ・ナーバン
“ナーバン博士、これ以上の面会はネレイド少将の健康に障る恐れがあります”』

“ユースレスク”の合成音が面会時間の終了を告げていた。

「じゃ、わたしはこれで帰る。余り、エイミィを苛立たせないようにね。優秀な士官だけど、あの娘はまだ一七だつてことを忘れないようにね」

レーフラムが急の高熱で入院を余儀なくされたのはメイリアがヒューロザイオンを離れた直後。彼の入院に際して、空軍病院のホッフア軍医長とノーラ中尉がかなり激烈なやりとりをした、とレーフラムは後に聞かされた。

連邦空軍艦隊の総旗艦『シゲナ・フォース』号の軍医長を勤めているエミル・ノーラ中尉はこの歳一七歳。一七歳のときに家族の反対を押し切って士官学校予科の生徒となっている。恒星区セリアに置かれた士官学校分校の首席であり、連邦暦五七〇年の半ばには卒

業して少尉候補生となる予定だったが、銀河系大戦の勃発と戦艦『シグナ・フォース』号の竣工が、彼女を予定よりも半年以上早く戦場へ引き出したのだ。大戦が中期に入ってからは一〇代の大尉も珍しくはなくなつたが、この時期では確かに例外的な存在だった。

「……気をつける」

「……」

苦笑と微笑の中間の表情で見送るレーフラムに、エリサは微妙に肩を竦めて身を翻した。

また、発熱を起こしかけているのが、レーフラムにはよく分かつた。思つに任せぬ自分の身体がいまいましい。

彼は数千光年の彼方にいる恐るべき敵を思った。ル・ヨント共和国宇宙艦隊の総帥クローネス・マールク元帥。会つたことも、言葉を交わしたこともない、その相手を敵と呼び、戦わなければならない。そして、やはり恨みも憎しみもない多くの将兵を戦場に斃さなければならないのだ。

……なぜ、そして、何のために？

レーフラムの病臥に関わりなく、連邦空軍は反攻の準備を進めてもいる。

“アルウェスタの会戦”の詳細は、様々な角度からの分析にかけられたが、戦訓分析のために召集された中堅士官の中には、ハイドリヒ・ネーベルシュタット、リン・シー・ファン、コーウィン・ペルヴィッツ、オットー・ランス・リューメルら、大戦末期に頭角を現すことになる若手士官の名が散見する。

「大軍とはこうやって運用するのだ、という実地教育を教材付きでしてもらつたような気がしたものだ。数万隻単位の艦隊の作戦運用について私たちは余りにも無知だった……いや、作戦では互角でも、作戦に追従できるだけのノウハウを我々は持たなかつたのだ……」

やはり分析に参加したアヴドーチャ・アルドリーシャ中佐は、マールク艦隊の巧妙な艦隊作戦に感嘆を隠していない。

「連邦空軍艦隊が壊滅しなかつたのが不思議なくらいだ」

戦術的情報の分析が参謀本部の任であつたとすれば、物的な情報の分析はヴラディミール・カトゥー少将の艦政本部に委ねられている。

「作戦能力とノウハウだけではない」

カトゥーは言う。

「ル・ヨントの主力巡航戦艦は、連邦空軍の主力戦艦である『コーネット』級を速力・火力・防禦力において凌駕している。主砲の命中率、艦載機パイロットの練度、宙雷の破壊力ともル・ヨント艦隊が連邦空軍艦隊を上回る。故に、同数の兵力で指揮能力が同レベルであれば、連邦空軍艦隊はル・ヨント艦隊に勝ち得ない。この条件でル・ヨント艦隊に決定的な勝利を求めないのであれば、第一に『コーネット』級を初めとする主力巡航戦艦、艦載機の設計の根本の見直し、第二には改良された艦艇・艦載機の早期大量の戦線投入、第三には『シグナ・フォース』級の大量投入による艦隊指揮能力の向上が必要である」

タウンナー大統領は艦政本部の意見具申を取り入れ、『シグナ・フォース』級戦艦建艦計画の第二期分の一五隻、また議会で反対が強い三〇〇〇シエルメス・ヤード級超ド級戦艦『シグナス』級一〇隻の建造を相次いで承認した。『コーネット』級戦艦をスケールアップした『モルダウ』級巡航戦艦、『シグナス』級の拡大改良型の『ノヴァ』級超々ド級戦艦、『ドーストレッツシャー』級航宙母艦などを含む第一次建艦補充計画第二期、第三期の予算も同時に承認を受けるに至る。

「これらの艦艇が竣工し、前線に配属されれば、数的にも質的にも連邦空軍はル・ヨント艦隊を完全に圧倒するだろう」

カトゥーはそう言いきった。

しかし、第一次建艦補充計画第一期分四万隻は既に発注され、ル・ラント戦艦に質的に及ばないと評された『コーネット』級戦艦も数千隻の規模で建造が進められている。

この点においての連邦空軍の弱みを、カトゥーは次のような言葉で認めてもいるのである。

「作戦面では互角であるとするならば、何とか数で圧倒し得るだけのものを揃えるまでは艦隊の壊滅は避けてもらわなければならぬま

い
この時期のマールクたちにとって幸いなことに、そして連邦空軍にとつては不幸なことに、実際に『ノヴァ』級を初めとする

「アルヴェスタ後」級の艦艇が前線に姿を見せ始めるまでには、まだ二年あまりが必要だった。すべての住民が戦争の継続を願っていないわけでもないにしても、シエルメス連邦という機構は大戦継続に

向けて、巨大な慣性をはらんで動き出したのである。